

るだろうか、と思いましたが、正直、自分は食べなくとも、子供には食べさせてやりたいと思います。これも親心ではないでしょうか？しかし、教祖の御心は、世界だすけという、広大な親神様の親心であります。その大きな御用の上には、あえて物を施し、執着を捨て、一家揃って貧に落ち切る事によって、心に明るさが生まれ、自ずから陽気ぐらしへの道が開けることを、お子様たちに伝えられたのであります。本来ならばお通りならなくてもよい苦難の道中を、後世で道を歩く我々の話の台とする為に、あえてお子様と共に辛酸の道をお通り下さった教祖とご家族一同様に、事あらためて心から御礼をせずにはおれないのであります。

ご不自由な生活をされながら、人だすけをされるうちに、初めて四合のお米をもつて、お礼参りに来る人ができたのもこの頃の事でありませう。そして、この後、おびや許しという安産のさづけをきつかけとして、人々は次々とお屋敷におたすけを願いにくるようになりまして。おさしづに『話

を楽しませく、長い道中連れて通って、三十年来寒ぶい晩にあたるものも無かった。あちらの枝を折りくべ、こちらの葉を取り寄せ、通り越して来た。神の話に嘘は有るまい。さあくあちらから出て来る。こちらから出て来る』(明治29年3月31日)と仰せられます。又、天保9年10月、親神様と中山家の問答の中で、親神様は『今は種々と心配するは無理でないけれど、三十年経つたなれば、成程と思ふ日が来る程に』と諭されておりますが、先々まで見抜き見通されている親神様の御力に、事改めて平身低頭の思いが致します。

冒頭にもお話いたしました、真柱様は、現在私たちが心がける信仰姿勢について、『お互い、親神様に働いて頂けるように、しっかりと、そして素直に、教えを心に治めていかなければならない』又、人材の育成については、『人には心があり、単に育てられる受け身の存在ではなく、人を育てるためにはまず育てようとする者の成人の努力が欠かせません』、とご教示下さ

りも大切ですが、又教会に繋がるよふぼく、信者の皆さんも、教会へできるだけ足を運び、親神様・教祖に心を繋ぐように勤めて頂きたいと思うのであります。』と述べられております。もちろん、只今はコロナ禍という非常時であり、全ての祭事や行事は規模を縮小、もしくは中止を余儀なくしている現状であります。しかしながら、所属の教会といわずとも、ご自宅周辺には教会があると思います。感染対策をしながら、密を避けながら、家族単位で身近な教会にお参拝することで、親神様はお受け取り下さり、ご存命でお働き下さいませ。教祖が、どんな荒波の中でもお導き下さるものと信じます。

陽気ぐらし世界建設実現の日は、まだまだ先のことだと思ひます。そして、いつの日か次代に信仰のバトンを繋ぐ日がやってきます。その日、ぜひ一条に心を繋ぎ、教祖のひながたを常に抛り所と指針として、一手一つの心でつとめていきたいと存じます。

節 分 行 事

2月2日、今年はコロナウイルスの感染拡大を鑑み、大教会3階会議室にて、住込みのみで節分行事が開催された。大教会長司会のもと行事が始まり、鬼の登場に泣き出す子供もいたが、みんなで豆をぶつけて鬼を追い払った。そして今年も丑年、年男年女の方がお菓子を撒き、凄じ勢いでお菓子を拾った。

続いて、子供から大人までみんな一緒に津軽弁のカルタ大会を行い、多く取った方には賞品も渡された。住込みのみで参加者は少なかったが、みんなで行事を楽しんだ。

